# チーム医療：緩和ケアチーム

## ―関係部署―

| 部　　署 | スタッフ名 |
|---|---|
| 緩和ケアチームリーダー<br>肺腫瘍内科 | 森山　あづさ |
| 泌尿器科 | 射場　昭典 |
| 外　科 | 市川　善章 |
| がん性疼痛看護認定看護師 | 杉野　幸恵 |
| 栄養管理科 | 山本　理恵子 |
| 薬剤科<br><br><br>緩和薬物療法認定薬剤師 | 安井　結香里<br>若林　里絵<br>越山　晶弘<br>北庄司　敦久 |
| リハビリテーション科 | 津野　光昭<br>藤田　将敬 |

## ―概要―

緩和ケアチームは、肺腫瘍内科・がん薬物療法専門医の森山医師が身体面の苦痛を、がん性疼痛看護認定看護師の杉野看護師は、入院・外来と切れ目のない緩和ケアを提供できるよう各部署と連携を図っている。

2022年4月からは泌尿器科の射場医師がチームに参加し、2023年2月にPEACE指導者研修を受講した。2022年秋頃には外科の市川医師も参加し、術後せん妄等も中心に内科、外科系の多方面から患者さんの診察を行える体制となった。

栄養士は、摂食困難な患者への栄養指導や、摂食を改善する目的の特別なメニューを提供する。理学療法士は患者の回復力を高め、生活の質を維持、向上するのに重要な役割を果たしている。

上記に薬剤師を加えた多職種のメンバーで週1回水曜日午後にカンファレンスを行い、各病棟スタッフとも連携して回診をおこなっている。心療内科面の精神での診療はこころあ診療所の精神科医・横谷昇医師へ引き継ぐこととなった。院内患者を中心に金曜日午前に外来対応して頂いている。

2014年『がん診療連携拠点病院の整備について』で、緩和ケアチームの設置と緩和ケア研修会を実施することが、がん診療連携拠点病院の指定要件とされ、2019年まで院内で研修会を開催してきた。その後コロナ禍の影響で院内研修会は2年連続して中止が続いていたが、2023年1月29日約3年ぶりとなる緩和研修会を自病院で開催することができた。過去最大人数となる34人が参加登録したが、当日3名のキャンセルが発生し、最終的には30人の多職種が参加した。院外からも医師1名、心理療法士1名の参加があった。依然としてコロナ患者の入院と院内発生も報告された状態であったが世間の認識も緩和され、常識的な清潔対応のみで問題無く会を終了することが可能であった。次回は2024年5月開催を予定している。

2022年度はコロナ禍とはいえ、特に後半は落ち着いた状態での診療が行えるようになっていた。今後も旧来の形式にとらわれず、個々に情報を収集し、負担の軽減を図りながら職務をはたしていく。

## ―実績―

2018年『アドバンス・ケア・プランニング（以後、ACP）を含めた意思決定支援を緩和ケアとして提供できる体制を整備すること』が、地域がん診療拠点病院の指定要件に追加された。当院では、がんの治療方針を示すインフォームド・コンセントの場に、担当医とともにがん性疼痛看護認定看護師の杉野看護師が同席し、ACPを含む病状説明を行っている。2019年以降の精神担当医師が不在となり、病棟からの精神面での依頼に対応することが迅速には困難となったため、一時依頼件数は低下が、認定看護師の緩和専従としての活動時間が確保され、外来→病棟→外来（在宅）と継続支援を行う事が可能となった。

診察時間だけでは患者・家族が理解しきれなかった事項についての質問や相談に可能な範囲で応じている。

2022年度緩和チームでの介入症例数はのべ232人。

新規患者数88名。ACP介入件数は229人。緩和ケア外来患者数37人（入院対応含む）。

緩和ケア外来は来年度月曜日再開を検討中。がん看護外来は月曜日午後、杉野看護師が対応している。

## ―今年度の成果と反省点―

昨年と同様、病棟では家族面会や外出外泊の制限が続き、院内クラスター発生からはさらに体制が厳しくなり、終末期の患者が家族に面会困難な状態が続いた。

病状が安定している方は緩和病棟のある病院へ転院し、ご家族自ら面会可能な施設や療養型病院を探し、希望の上転院することも数件見られた。今後当院でも対応に検討が必要な問題と思われる。

## ―来年度への抱負―

大阪府がん拠点病院として地域連携をすすめ、がんを中心とした緩和医療に携わっていく。

来年度も介入症例数を増やし、個々の患者に対する丁寧な対応を目指していく。